

オーディオ実験室収載

アースアキュライザーの導入(16)(HP 収載) ースピーカー接続端子と仮想アースの接続(2)

1. 始めに

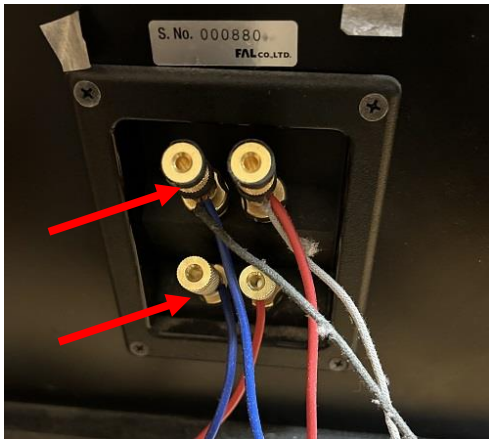
前報(15)に引き続き、スピーカー端子と仮想アースの接続に使用してみます。

2. アースアキュライザーEA-1 の試聴計画

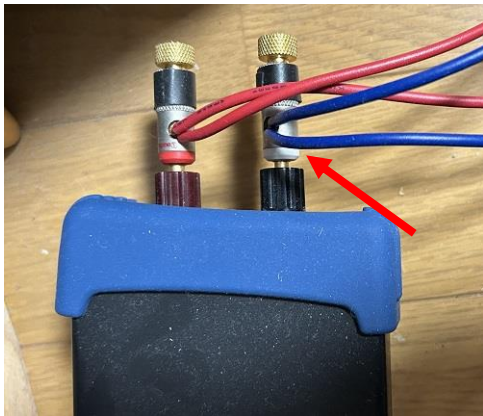
前報(15)の結果を踏まえて、仮想アースは Pulshut を貼った銅板と自作仮想アースの同時接続としてみます。



接続箇所は、まず、前報(15)と同じく FAL C90EXW の平面ユニットの方のスピーカー端子のマイナス側、次にハイルドライバーの方のスピーカー端子のマイナス側、さらにスピーカーアキュライザーの出力側の端子としてみます。この端子からは FAL C90EXW の平面ユニットとハイルドライバーへのバイワイアリング用スピーカーリベラメンテケーブル 2 本の 2 対が出ていますので、マイナス側端子に接続します。



上側端子：ハイルドライバー
 下側端子；平面ユニット
 右側端子：プラス
 左側端子：マイナス



右側端子：マイナス
 左側端子：プラス

音源は前報(15)と同様、下記とします。

STAGE+

ベートーヴェン ピアノソナタ 30 番 31 番 32 番

マウリツィオ・ポリーニ (ピアノ)

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ

シュロモ・ミンツ(ヴァイオリン)

3. アースアキュライザーEA-1 の試聴結果

上記の 3 箇所 **Pulshut** を貼った銅板と自作の仮想アースをアースアキュライザーで接続して聴いていきます。

ベートーヴェンのピアノソナタでは、平面ユニットの方のスピーカー端子は、前報(15)の印象と同様、**Pulshut** を貼った銅板の打鍵のエッジの立ち方と自作仮想アースの力強さの双方の特徴を出しています。

ハイルドライバーの方のスピーカー端子は、仮想アースの接続なしに戻ったような感じで平面ユニットの時のようなクリアさはなくなり、平面ユニットとハイルドライバーのどちらを選択するとすれば、平面ユニットへの接続ということになります。スピーカーアキュライザーの出力側のマイナス端子は、平面ユニットとハイルドライ

バーの双方に効果が及ぶはずであり、高域の輝きや低域から中域のアタック感も含め、レンジ的にもバランスがとれた音になっています。

バッハの無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータでは、平面ユニットの方のスピーカー端子は、前報(15)の印象と同様、ヴァイオリンの滑らかさもボウイングの力強さもあります。

ハイルドライバーの方のスピーカー端子は、ヴァイオリンの高域の滑らかさは残りますが、ボウイングの力強さは後退しますので、平面ユニットとハイルドライバーのどちらを選択するとすれば、平面ユニットへの接続ということになります。

スピーカーアキュライザーの出力側のマイナス端子は、滑らかさと切れが両立しており、この曲の味わいを十全に引き出しています。

スピーカーアキュライザーSPA-7 の取説において仮想アースなどを繋ぐことの禁止の記載がありましたが、恐らくは仮想アースの固有の音が重畳することを嫌ってのことと思われ、アースアキュライザーを使用すれば、そういった仮想アースの固有の音が加わることを防止し、仮想アースの効果のみを活かせるのではないかと思われ

4. まとめ

FAL C90EXW の平面ユニットとハイルドライバーのそれぞれのスピーカー端子のマイナス側とスピーカーアキュライザーからバイワイヤリング出力のマイナス端子に Pulshut を貼った銅板と自作の仮想アースをアースアキュライザーで接続してみたところ、スピーカーアキュライザーの出力のマイナス端子がもっとも望ましい音質を示し、スピーカーアキュライザーの音質を損なうようなこともありませんでした。

以上